

氏名・(本籍地)	駒井信勝(埼玉県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第104号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	中期密教に至る灌頂儀礼の発展過程
論文審査委員	主査 苔米地誠一 副査 野口圭也 副査 高橋尚夫

駒井 信勝 氏 学位請求論文審査報告書

## 「中期密教に至る灌頂儀礼の発展過程」

### 論文の内容の要旨

本論文は中期密教経典とされる『大日経』に至る以前の灌頂儀礼について、その展開過程を、儀礼の構造と目的(灌頂儀礼の果たす機能)という面から捉え、初期密教から中期密教への展開の一側面を論じようとするものである。

初期密教経典の研究は、それ自体が少ない上に、本論文で扱っている中期密教直前の初期密教経典は、個別の研究はわずかにあるが、まとめて論じたものはほとんど無い。本格的な研究としては、わずかに大塚伸夫博士の研究が存在するだけで、更に灌頂儀礼の研究となると、ほとんど無かったといって良いであろう。本論文は、これまであまり扱われてこなかった中期密教が展開する直前の初期密教を、灌頂儀礼の発展の面から論ずるもので、七日作壇法が初めて説かれる『陀羅尼集経』から『蘇悉地経』『蕤呬耶経』『金剛手灌頂タントラ』までを扱っている。中でも『金剛手灌頂タントラ』は『大日経』直前の先駆経典として位置づけられているもので、これらに次いで登場する『大日経』の灌頂儀礼を考える上で極めて重要な経典と言える、

先づ序論において、本論で取り上げている各経典に関する先行研究を批判的に振り返り、『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』については経典の構成や曼荼羅に

関する研究はあるが、灌頂儀礼に関しては未だ為されておらず、『蕤呬耶經』『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼に関する研究はあるが、「一連の儀礼の構造や、灌頂の実践意義は明らかになりつつあるが、瓶水灌頂という名のもとに一括りにされ、各經典に解かれる瓶水灌頂の方法については論じられていない」とする。更に「『蕤呬耶經』には、除難灌頂・成就灌頂・増益灌頂・阿闍梨位灌頂の四種類の灌頂が見られることから、『蕤呬耶經』編纂時には、灌頂儀礼が様々な用途で存在していたことが読み取れる。既に大塚氏による一連の研究において、『蘇婆呼經』の灌頂儀礼は除難灌頂であり、『蕤呬耶經』の灌頂儀礼は阿闍梨位灌頂であると、その意義が明らかにされている。そこで、新たに『陀羅尼集經』と『蘇悉地經』に対する考察を行うなかで、改めて四つの經典の灌頂儀礼の目的を確認したい」として、本研究がこれらの經典に説かれる灌頂儀礼を、夫々の役割・機能の面から位置づけていくことを述べる。

初めに第一章「『陀羅尼集經』の灌頂儀礼について」では、『陀羅尼集經』十二巻の内、第四巻と第十二巻に見られる灌頂儀礼を比較し、その特徴と機能を考察している。『陀羅尼集經』はインドにおいて個々に成立した数種の經典を阿地瞿多が十二巻に集成したものと考えられているが、その中で七日作壇法の灌頂儀礼が説かれる第四巻と第十二巻を比較する。ここでは灌頂儀礼の基本構造が既に整っているが、第十二巻の儀礼は、第四巻の儀礼を元に、他の巻に収集された諸尊格をまとめ、三部構成に編成し直して曼荼羅が構成されており「一連の灌頂儀礼の次第を見ると、弟子が新たに曼荼羅に入り、自らの本尊を決定するための灌頂儀礼と言える」と結論づける。

第二章「『蘇悉地經』の灌頂儀礼について」では、その内容から、受者は既に別の方法により自身の本尊が定まっていることが推測されるとし、三部立ての曼荼羅が部主・部母・部心といった尊格を中心として配置され、中尊は受者の所持する真言尊が属する部族の部主尊であり、その曼荼羅の中尊の前に、成就させたい自身の本尊を安置することや、瓶水灌頂の場面で、灌頂に用いる瓶とその瓶を加持する尊格の対応関係が未熟ながらも構築されていくことを指摘し「成就法が成就していない修法者の障礙を取り除き、改めて自身の本尊によって灌頂を行うことで成就に導くといった役割が考えられる」として、成就のための灌頂であるとする。

第三章「『蕤呬耶經』の灌頂儀礼について」では、大塚論文を継承しながら、阿闍梨位を与えるための灌頂であることを確認し、その七日作壇法が『陀羅尼集經』に見られたものとほぼ同様の構造であるものの、受者の菩提心を発すことなどの新たな要素や阿闍梨と受者が共に曼荼羅を画くようになることなど『陀羅尼集經』からの変更点を確認する。また曼荼羅の中尊に関しても特定の尊格を指示せず、阿闍梨と受者によって異なるものと考えられるとし、瓶水灌

頂は曼荼羅中の全ての諸尊の真言によって行われるが、これは受者がこの灌頂によって阿闍梨になれば、後には当然他の弟子に灌頂を授けることになるからであるとする。そして「阿闍梨位の灌頂において、全ての諸尊の真言によって灌頂されるのは、この灌頂によって阿闍梨となる受者が、曼荼羅上の諸尊を全て成就するためであろう」と結論する。

第四章「『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼について」では、『金剛手灌頂タントラ』が上記の三つの経典とは異なり、釈迦から普賢への灌頂をモデルにした阿闍梨から弟子への灌頂儀礼が説かれるとする。即ち本経では、釈迦から普賢への金剛杵の授与があり、これによって普賢が金剛手に転換し、金剛手が神通神変を示す。灌頂はこの過程を儀礼的に再構成したものであり、『蕤呬耶経』に見られる阿闍梨位を得る灌頂を引き継ぎながら、灌頂儀礼によって受者を金剛手＝転法輪者に転換させることにあるとする。また先行研究において、曼荼羅の中尊について毘盧遮那説と金剛手説があることを指摘し、『大日経』「秘密曼荼羅品」の金剛手の記述を対比し、本経にこの金剛手が転法輪者となることを指摘して、中尊は金剛手であると結論する。それにより灌頂の目的は、釈迦より伝えられた教説を相承することと、受者がその教説を伝えていく金剛手＝転法輪者へと転換することであるとする。また灌頂儀礼の構成が前三経典と相違のある点を指摘し、錯簡の可能性も考慮しながら、本経の教説を曼荼羅や灌頂儀礼に取り入れることにより、その構成が変化したものとし、ここに中期密教の成立を見る可能性を指摘する。

### 審査結果の要旨

本論文では中期密教を代表する『大日経』の私立する直前に位置する『陀羅尼集経』『蘇悉地経』『蕤呬耶経』『金剛手灌頂タントラ』の灌頂を、(1) 灌頂儀礼の目的、(2) その目的を果たすための灌頂儀礼の構造、(3) その灌頂に用いられる曼荼羅の構造、(4) その目的を果たすための瓶水灌頂の方法の4点から考察しているが、特に灌頂瓶の役割を、その瓶を加持する尊格の分析から解明している点は、これまでに無い独創的な視点であり、曼荼羅の構成の問題と共に、灌頂の目的・機能的役割を論じている点は大きな成果であると評価できよう。また第二章で扱われた『陀羅尼集経』については、経典そのものの研究が少なく、未開拓なテーマである。当然ながらそこに説かれる灌頂儀礼の研究も、本論の独創的な部分である。ただ『陀羅尼集経』には第四・十二巻以外にも、七日作壇法としての構成は具備しないものの、数種の灌頂儀礼を説く巻がある。これらの儀礼についても、七日作壇法との関係性を含めた検討が為されると、『陀羅尼集経』それ自体の成立問題や、更には七日作壇法そのものの成立・発展過程を解明する糸口が見つかるのではないかと思われ、今

後の更なる研究を期待する。また『蘇悉地經』に関しては、使用される瓶の性格を分析した点に本論の価値が存するであろう。これまでも中尊が何であるのかが問題とされてきたが、本論では瓶と曼荼羅の分析を通じて、修行者の所持する本尊によって変化するものであることを解明し、そのことによって何尊の成就法であっても、その成就法を成就せしめるための灌頂であることを明示した点が評価されよう。『蕤呬耶經』の関しては、先行研究を参酌しながら、更に『陀羅尼集經』との比較を試み、その特徴・相違点を、阿闍梨位灌頂である点に求める解釈を提示している。『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼については、先行する大塚論文を継承しながらも、詳細な本文読解により、釈迦から普賢への金剛杵の授与と、普賢の金剛手への転換、更には金剛手の神通神変と、諸尊（菩薩～諸天・外道）の入曼荼羅、金剛手の転法輪、といった教説を、灌頂儀礼が再構成している点を示し、この灌頂が受者をして金剛手という特定の尊格に為さしめるものであることを指摘し、『大日經』以前における中期密教成立の可能性に触れるなど、大胆な推論に及んでいる。

全体として丁寧で詳細・緻密な本文読解を心がけながら、一つずつ問題を積み上げて結論に到達する論は説得力があるといえよう。ただ灌頂儀礼の問題に限定されるため、各経典それぞれの全体を通じた性格の解明や、各経典の受持者・作者グループといったバックグラウンドの問題に及んでおらず、経典間相互の関係性を含めて、不明瞭な点も残されている。バックグラウンドの解明は、本論における灌頂の目的・機能的役割といった視点において、更に深い洞察をもたらすであろう。またテーマを「中期密教の成立に至る…」としながら、『大日經』の灌頂儀礼に及ぶことが出来なかったことは物足りなさが残るところである。本論の成果を元に、修士論文で扱った『大日經』の灌頂儀礼に関する研究の更なるブラッシュアップを図り、真に「中期密教の成立に至る灌頂儀礼の発展過程」の実体解明を目指して、今後の研鑽を期待する。

以上、本論文はこれまでの研究成果を踏まえながら、新しい取り組みを試みたものであり、その論述は概ね首肯される。文献の読みに、更にもう一段の精密さが加わると、議論の説得力もより深まるであろうが、当該文献そのものが（殊に『陀羅尼集經』のような漢訳文献のみの場合）、テキストとしての精密さを欠いている面があり、より「精密な読み」ということ自体が難しい面もある。そのような中で本論の試みは、必ずしも十分に灌頂儀礼の実体を解明できているとまでは言いがたい面も残るが、先行研究に対する態度も誠実で客観的であり、課程博士の学位に値するものと考えられる。